

もう一つの伝統
——個人の政治からディスアビリティ・アートへ

堀 内 浩

もう1つの伝統—個人の政治からディスアビリティ・アートへ

The Other Tradition: From Personal Politics to Disability Arts

堀内 浩

訳者解説

1. 本論について

当翻訳は、「2006年9月のランカスター大学における第19回障害学研究大会 Disability Studies Association Conferenceにおいて配布された」資料「The Other Tradition: From Personal Politics to Disability Arts」である (Sutherland2006b)。当該学会大会において Allan Sutherland は、同内容の発表を行っているとして記録されている (Sutherland2006a)。

さて、本論の内容と重要性は、現在の障害学におけるイギリス障害者運動や障害学の立場や、その源流とも言えるUPIASの活動を考慮すれば、より重要性が理解できるものである。つまり、本論からは現在の障害学を中心的な思想であると言える障害の社会モデルという視座などが、「実際」にはどのような活動や人物、団体、そして歴史的背景や地域特性から見出されているのかについて、その原型や当時の雰囲気や「空気」の概要を多少ではあるとはいえ垣間見ることができる。それだけではなく、当時の障害者団体UPIASやLN (Liberation Network of People with Disabilities) がどのように活動を行いながら、障害を政治的なものとして理論的にも実践的にも提示し続けてきたのかについて一定程度理解できるものとなっていると考えられる。

そして、現在のイギリスにおける障害者運動、特にディスアビリティ・アート界限においてどういった考えを持ちながら、障害当事者らの生きられた経験を芸術作品として位置付けているのかといったこともまた、障害者運動の歴史の一部の帰結 (あるいは途中経過) として位置付けられて語られていることも注目すべきである。こうした本論の特徴や重要性を端的に述べるのであれば、本論はUPIASと同時期に活動を行っていた障害者の解放ネットワークについての史的事実や、その活動と現在のディスアビリティ・アートとの繋がりについての内容であると言える。

その他の特徴として、UPIASについては、障害者運動の文脈においては説明の必要がない程に重要な組織であるとされており、障害の社会モデルの源流の1つと言われている (その詳細は田中 (2005) や星加 (2007)、杉野 (2007)、そして立岩 (2012) などを参照していただきたい)。しかし、同時代のその他の障害者団体がUPIASと、あるいはUPIASとは別に (同時代的に) どのような活動を行っていたのかについてはあまり明確にはされていない。そしてその活動がどういった「実」を結び「花」を咲かせたのか、現在においてその活動はどのように見なされてきているのか、潮流に位置付けられ注目を集めることがないのは重要ではないというこ

となのか、といったことについてもまたそうである。

こうしたことから、本論は現在の障害学、特に日本のそれにおいてあまり例にないと言える障害者運動や社会モデルの研究の1つであると考えられる。そのため、日本における障害者福祉論や障害学などで重要であると位置付けられているような、現在の職員-利用者間の援助関係や障害自体についての視座、そして、障害者運動の歴史的推移と当事者における障害の意味やアイデンティティなどといったテーマを深めるに当たって一定の意義を本論には見出すことができると確信したため、今回 Allan Sutherland に直接連絡を行い、訳出許可を取り翻訳を行った次第である。

2. 当該翻訳原著者について

本論著者の Allan Sutherland は、impairment としててんかんを持っている障害当事者である。そして現在、Allan Sutherland はエドワードリアー財団 Edward Lear Foundation に所属しながら、そのディレクターとして、ディスアビリティ・アートのプロジェクトを精力的に行っている。最新の作品として、例えば「Neglected Voices」などが存在しており、我々はwebページの Disability Arts Online (2013) から、彼の作品を写真や詩を通して触れることができる。また、彼の最近の仕事の概要などのインタビューが Royal College of Physicians (2013) にあり、そこでは彼の何年か前の姿を写真で見ることができる。その彼の impairment の詳細や現在の社会的な立場は、今回の翻訳のために Allan Sutherland に作成していただいた profile (Sutherland2013) や1981年の Personal Statements (一般的には、身上書、自己紹介書などと訳される) (Sutherland1981:Appendix.1) を参考としながら、訳者がその2つを簡潔にまとめていった以下の彼の紹介文を参照していただきたい。

さて、Allan は4歳のときにてんかん患者

と診断され、当時は身体に部分発作があったという。それは、何かを行っていると、自分の顔と右肩が引き攣ってくるものであった。これら「引き攣り」は彼の幼年期の間ずっと続いていたが、Allan 自身はこの引き攣りに関して、彼の両親が過度な心配をしなかったことなどから、引き攣りが彼の人生へ影響を与えることはほとんどなかったのだと述べている。

そして、Allan は大学の最終学年の時に、初めて、意識を失う、また、けいれんを起こす、舌を噛む、口から泡を吹く、そして、発作後に混乱しながら意識を回復するといった、てんかんの典型的な徴候ではない、大発作を起こしたという。その発作は、彼の肩を脱臼させるほどに激しいものであった。その後、およそ2ヶ月に一度大発作があり、おおむね毎日軽い部分発作が継続した。彼は、「もし私に脱臼した肩が無いのであれば、私は自身のてんかんを私の以下のような仕事(目的)のために適切に制御されているのだと見なすだろう」と述べている。

彼は(1981年当時)はフリーランスの作家とジャーナリストであった。彼の仕事の1つは「Fall Down and Be Counted」というもので、(本文でも出てくるように)その内容はてんかんになることについての映画の台本から生まれたものである。その仕事の他に、障害についての映画として National Film Theatre season of films 「Carry On Cripple」を作成している。この映画は彼がインディペンデントの映画制作者の Steve Dwoskin (イギリスで活動をしていた実験映画の作家である。彼は9歳の頃にポリオを患い、松葉杖により移動を行っていたが、小児麻痺により移動の制限が増えてきたことから、後に車椅子を使用するようになったという (IMDb2013))。なお、National Film Theatre とは、現在は BFI Southbank と呼ばれ、British Film Institute により運営されて

いる、古典かつインディペンデント、そして非英語圏の映画を専門にしている英国の映画館である (British Film Institute 2013) と共に組織した仕事である。

そして現在、Allan Sutherlandは、作家、パフォーマー、strategic thinkerとして、何年もの間、ディスアビリティ・アート運動の中心人物となっている (「strategic thinker」とは、strategic thinking 戦略的な思考を行う人であると考えられる。strategic thinking とは、主に会社、企業、組織などの経営、運営 (マネジメント) やリーダーシップの文脈においてよく使用される用語である。つまり、この文脈において、自身をstrategic thinkerと提示していることは、彼が自身の行っている障害者運動やディスアビリティ・アート実践などを障害者としての戦略的行動として位置付けているのだと考えられる)。1970年代後半から、彼はBlock Telethon (「Telethon」とは、基金を募集するためなどに行われている長時間番組であり、televisionとmarathonの合成語である。ちなみに、日本で言う所の『24時間テレビ「愛は地球を救う」』のことである (Weblio 辞書)。したがって、Block TelethonとはTelesonの放送をブロックする運動や活動のことである) のようなキャンペーンやLNのような組織を通してラディカルな運動にかかわっていたという。そして、ロンドンのバスを障害者に利用可能にするために、バスへのアクセスを容易にしていくようなキャンペーンなども行ってきた。

こうしたことからAllanは、かつて「ディスアビリティ・アート連盟の最初の政治的立場」として記述されたこともあったという。彼は30年もの間、以下のような方法によって障害者の声を聞く方法を探求し続けている。それは、スタンドアップコメディやポエトリリーディング、そして、ラジオやTVの台本作家やジャーナリズムという形式をとって行われているのである。

具体的には、Brunel大学における市民参加センターのレジデンス作家として、Allanは障害者のライフヒストリーインタビューから構成された4つで全体を成す詩a set of four cyclesからなる「Neglected Voices」をプロデュースしている。この作品や、Allanの他のトランスクリプションの詩の仕事、例えば、「Paddy: A Life」、「The Explorer」はDisability Arts Online (<http://www.disabilityartsonline.org.uk>) で見ることが可能である。

同様に、TVやラジオにおいては、障害のある作家としてAllanは恐らく、他の誰よりも障害のある俳優のためのその役割を創造してきたとも言えるだろうとも述べている。TV、ラジオについての彼の仕事creditsは、長期入所施設における障害者の集団についての内容であったり、ある賞を獲得しているラジオドラマ「Inmates」や、「EastEnders」、「The Bill」といった有名なドラマシリーズの仕事も含まれている (「仕事credits」とは、出版された著作物や舞台演劇、そしてTVなどで放送された番組に使用された材料の提供者への敬意や信頼のことであり、主として番組開始および終了時にスタッフや演者名などが表示されることを指示している (Weblio 辞書))。そして、彼の仕事は、BBC1、BBC2、Channel4、Radio Four、およびRadio Fiveで放送されていたという (「BBC1、BBC2、チャンネル4、Radio Four、およびRadio Five」といった区分で意味されていることは、BBCやChannel Four Television Corporationが、英国放送協会というNHKと同様の意味合いにおいてイギリスの国営放送 (BBC 2013) であるということだけではなく、そのチャンネルを視聴する人間もまたインテリや知的な階層であるということを示していると考えられる (世界大百科事典 第2版))。

また、彼は「Hidden Dragons」という以下のような本を編集した。それは、Arts

Disability Wales's 'Write Stuff' プロジェクト (当該プロジェクトは本文にもある“Hidden Dragons”などを出版したものである。“Hidden Dragons”はAllan SutherlandやElin ap Hywelにより編集されたものである(World Institute on Disability2004)) から生まれた障害者による散文詩や韻文のアンソロジーのことである。そして、彼の本『Disabled We Stand』(1981)は、イギリスとアメリカで賞を獲得しており、障害者国際年にイギリスにおいて出版された最も優れた著作のための賞the Oddfellows Social Concern Book Awardをも受賞している(この「the Oddfellows Social Concern Book Award」とは、Jeremy Warburg (1986)「A VOICE AT TWILIGHT:Diary of a Dying Man」や、Oliver Sacks (1991)「Seeing Voices」などにも贈られた賞である)。この本は、初めて多くの人々を無力化されている人々として自身らを規定し同一視するための助けとなったのだと言われている。

そして近年、Allanはディスアビリティ・アートのシンクタンク、および研究組織であるエドワードリアー財団におけるディレクターである。彼は現在、障害者のケアラーになることについての仕事に関わり、それらを発展させているのである。

3. 当該翻訳の記述について

以下の翻訳本文においては、原注は両括弧、訳注は片括弧としていった。そして、disabilityやdisabildなどといった用語は全て先例(Barnes・Marsner・Shakespeare=2004; Oliver=2006)に倣い、障害や障害者、そして、無力化された人などとして記述していくことにしてきた。同様に、disability artという用語の訳出も障害者アートというような、アール・ブリュットArt Brut、アウトサイダーアート Outsider Art、そして障害者とカテゴリー化された人々が行う芸術活動自体のこと

といった意味合いよりもむしろ、障害当事者運動や障害学(そして、障害の社会モデル)における文脈での意味合いを持たせるべきであると考えたため、田中(2009a, b;2012a, b)などに倣ってディスアビリティ・アートと記述した(アール・ブリュットやアウトサイダーアートとは、川井田(2013)や島先(2010;2011)によれば一般的には正規のものとしてされている伝統的な(芸術、美術などについての)教育を十分に受けてはいない作家、特に障害者やマイノリティ、ホームレスなどといった抑圧され無力化されているカテゴリーの人々が行うアート活動一般やそこから産出された作品(群)のことを指示している。現在は、上述したようなカテゴリーの人々を「アウトサイド」として位置付ける(つまり、芸術の正規教育を受けた人々を「インサイド」と位置付けている)ことが差別的であるという批判によって、こうした活動や作品がエイブル・アート、ワンダー・アート、そして、ボーダーレス・アートなどと呼称されることもあるという)。最後に、翻訳を許可していただいたAllan Sutherlandへ記して感謝をする。

翻訳

もう1つの伝統—個人の政治からディスアビリティ・アートへ

アラン・サザーランド

1970年代から1980年代の変わり目において、2つの組織、隔離に反対する身体障害者連盟Union of the Physically Impaired Against Segregation (UPIAS)と障害者の解放ネットワークLiberation Network of People with Disabilities(以下、LNとする)は障害の新しい政治を創造しようとしていた。UPIASは、1972年にPaul Huntにより書かれたガーディアン紙the Guardian¹⁾への手紙から、突然姿を現わしたのであった

sprung from。それはVic Finkelsteinが応じた手紙のことである。その5年後に設立されたLNも、初めはMicheline Mason、Merry Cross、そしてChristopher Spenceにより、突然姿を現したsprang from。そのメンバーは、相互的カウンセリングco-counselling（以下、CCとする）²⁾としても知られる再評価カウンセリングRe-evaluation Counselling（以下、RCとする）や、American personal growth movementに取り組む障害者らであった。私は、UPIASが2人の男性により設立されたということを書き記すことは価値があると思われる。

一方、LNは、2人の女性とゲイの男性により設立された。RCはインターネットの陰謀論者によりカルトであると非難されている。私はその陰謀説が妥当性のあるものとは見なしてはいない。いわんや、インターネットで陰謀説を唱える人により主張されているように、RCの運動はサイエントロジーScientology³⁾の一部であるという秘密を持つといったことを私は信じていない。しかしRCは、新興宗教religious cultsや、より限定的な政治グループと共通しているある特徴を持っているのである。それは、単一の創設者、階級rankや階層fileへの議論についてのオープンではない一連のアイデア、そしてかなりヒエラルキーのある構造をその組織に含んでいる、などといったものである。

フェミニズムと関わりを持っていたMasonは、障害者は解放運動が必要であるという結論に達した。1979年に、彼女や同僚の2人が、他の障害者らと「解放のため跳躍Leap for Liberation」を組織した。Swindonの近くにあるLower Shaw Farm⁴⁾の週末のワークショップで、彼らは12人の障害者を招待したのである。彼らの全てがCC運動のメンバーであったわけではなく、ほとんど初対面であったのだ。

Masonは以下のように述べている。ワー

クショップに招待した人々は、障害者への抑圧について考えるため他の人々を導くオーガナイザーになるだろうという理由のために選ばれた。ワークショップへ招待された全ての人々が、特定のインペアメント周辺についていくらか独創的な行動を起こしていたのである。例えば、Maggie Woolleyはろうの放送キャンペーンDeaf Broadcasting Campaignの立役者であった。Keith ArmstrongはPeace News⁵⁾におけるディスアビリティの特集号を編集していたのだ。

私は「Fall Down and Be Counted」という、てんかんになることについての内容の企画中であったフィルムa proposed film about being epilepticにより、Michelineに注目されて、突然そのワークショップに招かれたのであった。その集まりは異常であり、また感情的な週末となったのである。我々は皆、自身らのライフストーリーや我々が出くわした抑圧、差別の異なった経験について話したのである。

それは、まさに構造化された道を走らされていたのであるrun（つまり、招待者Michelineらによって意図された方向へAllanなどの招待客が向かわされていた、ということである）。Micheline Masonは以下のように述べる。CCにおける3つのコース⁶⁾のリーダーthe three course leadersの自身らの社会的背景は、彼ら（リーダーから指導などを受ける人々のこと）に文脈を創造するためのスキルを与えることになる。それは、いつもではないものの、かなり大きな苦痛を伴うような人生や経験について、人々が自由に話すことを可能にするような文脈のことである。私はそのようなCCの態度について、全く公平な主張であると思う。

LNとかかわるようになった我々の多くは、RCのいくつかの側面に対して、あまり心地良くはなかった。そのため、我々はディスアビリティの個人的側面を扱うツールを必

要とするようになったのである。CCはそのツールを供給したのであった。私が気にかけていた限りでは、CCにすでに関わっていたLNメンバーは、そのままLNに残っていた。その他の人々はRCの技術から利益を獲得したり、転職していったのである。

こうした週末の集まりが、なぜ我々にとって強力な経験となったのかを理解するために、私は当時どういったことが起こっていたのかについてさかのぼって行きつつ、回想しなければならないだろう。当時は、我々が現在知っているような意味での、広がりのある障害者運動はなかった。社会モデルは現在では広く採用されてはいるものの、当時は製図板の上に存在していたとはいえ、まだそのように名付けられていなかったのである。当時の障害者へのアクセス可能な輸送サービスの欠如を考えれば、我々が同じ場所に集まることだけでそれ自体が重要な達成となったのである。我々は裸一貫でfrom scratch努力を重ね、全てを経験から学習しなければならなかった。例えば、誰も以下のようなことを思わなかった。視覚障害者やろう者の人々を含むコースにおいて、最も大きな問題の1つは、どうやって我々が皆互いにコミュニケーションを取るのかということである。しかし、2、3年後のLNの雑誌「In From The Cold」⁷⁾は、当然のことながら、テープで利用可能となる最初のラディカルな出版の1つとなった。

Lower Shaw farmの人々、そして、その後LNに参加した人々は皆、多かれ少なかれ、インペアメントや抑圧の経験の周りのある種の政治性を理解しようとした。我々のほとんど、つまり女性はもちろん男性もフェミニストのアイデアと出くわしていた。つまり、「個人的なものは政治的なものである」というアイデアのことである。そして、障害者としての我々の状況においても、そのアイデアは当てはまるように見えた。しかし、我々は独自に障害の政治性についての主張を行おうとし

ていたのである。私にとって、このLNへの出会いというものは、自身が無力化されているとは言えないような場所へ辿り着いたと考えさせられたことだったのである。

私はLNに参加をするまでは、他の障害者と出会うことができなかったのである。私はてんかんを持ちながら過ごしてきた20年間の生活において、自身と同じ障害を持つ人にかつて会ったことすらなかったのだ。その週末の集まりで、私は他者からの承認と無力化されたアイデンティティを見つけることができたのである。我々は皆、そうした旅を行ってきたのである。それは結局、突然ではあるものの、同士である like-minded 他の障害者の中へ自分自身を見つけることができたため、また、この障害者の集団の一部が絶対的に刺激的であった mind-blowing ためであろう。

我々は皆、その刺激的な過程を継続してきたかったのである。そして、我々はロンドンの支援グループと呼ばれる、何らかの組織を設立したのである。我々は、障害者の政治へ多くの活動の時間を使ってしまうために、その活動が支援グループの基本的目的から自身らを逸らしていったことをすぐに理解した。我々は支援グループと分離した組織を形成することに決め、我々はその形成したグループをLNと呼んだのである。我々が機会を逃した点として挙げられることは、より明確に、その支援グループとRCとの関係性を定義すべきであった、というものである。LNのほとんどのメンバー、特に後から参加した人々は、ロンドンの支援グループが民主的な組織であると前もって仮定していたのであった。支援グループ創設者は以下のように考えていた。つまり、多かれ少なかれ、支援グループのリーダーをLNメンバーの人々が担っていくこと、また、支援グループがRCの一部として引き続き行われていく、といったことを考えていたのである。これは後に、緊張状態を引き起こす原因となっ

た。Jo Freeman、彼女の古典として評価や影響力が高いフェミニスト的な内容のペーパーである「無構造状態の圧政tyranny of structurelessness」⁽¹⁾において、「インフォーマルなエリート」と呼ばれているものを支援グループは含んでしまっていたのである。なぜなら、彼らは組織の権力者を投票により決定してはいたために、選挙により権力者を落とせないvoted outからである。倫敦の支援グループは、そういった支配がなされていた集団であった。

LNは急激に成長した。1983年までに、150人のメンバーが加入していた。ロンドンやその周辺の州the Home Counties⁸⁾の人々が、LNにおいてはマジョリティであった。しかし、UKの到るところやアイルランドEire⁹⁾、スウェーデン、オランダ、東ドイツ、そして、アメリカにも広がっていた⁽²⁾。

対してUPIASは、その時点で数年間活動を行っていたことになる。しかし、それはイギリスにいる多くの障害者の大半へ届いてはなかった。私がインタビューした人々は、概してUPIASの存在に気付いていなかったとしている。Colin Barnes⁽³⁾が部分的に指摘しているように、その理由は、UPIASは主としてメンバー間で流通されている秘密の通信を使用しながら活動していたためである。多くのUPIASメンバーは、入所施設で生活していたのでこの通信の文書は秘密でなければならなかったのだ。そのため、おそらく支援を求める障害者がより明確な態度を持っていたならば、LNよりはむしろUPIASに辿り着いただろうと考えられる。

しかし、UPIASが特定のタスク、つまり、入所施設における重度障害者への隔離を攻撃することを定義した、ということもまた事実である。UPIASは社会運動の組織が明確な原理を確立する必要性も証明したのである。UPIASは、障害者の大多数は入所施設において隔離されていたのではなく、障

害者同士がお互いに分断されることにより無力化されてしまったdisempoweredという事実を確認していなかった。私はこの事実を、UPIASによるかなり深刻な失敗であったとして大きな衝撃を受けた。それは、巨大な民主的組織を確立しようという目的を公言していたUPIASがこのような失敗をしていたからである。私は不思議に思わざるを得ない。UPIASの態度の中に、ある種の拒否的なdismissiveness要素、自身ら以外の障害者が実際には無力化されていないという推定を行っていたこと、そして、より広域に浸透し、もっともであると見なされている障害への政治についての分析の代わりに、自身らは障害者個人の問題を扱っているだけという前提がなかったかは疑わしい。我々障害者が実際にはほとんど無力化されていなかったのであれば、それは、我々の 이슈がそれぞれ別々に観察されなければならないといったような理由からではなく、既存のexistingもっともであると見なされている障害への政治的な分析によって自動的に覆われ、隠されていたからである。UPIASにとって、それは我々の抑圧の度合いを我々のインペアメントの度合いによって確認できた、という構造になっているのだ。それは興味深くないだろうか？もし、社会モデルを発展させた集団が、医学の眼鏡を通して、自身ら以外の障害者を見ていると判明したならどのようなことになるのだろうか？私が主張していることというのは、もし、障害者運動を行っているのであれば、お互いの存在から孤立に打ち勝たなければならなかったということであり、また、お互いの経験を聞くことにより学ばなければならなかったということである。私は、LNがUPIASよりはるかに首尾よくそれらの2つのものを達成したと考えている。

LNメンバーの間における一般的な政治上の見解は、自由論者/左翼的であった。初期のあるメンバーは、労働組合の経験を持って

いたのである。私はラディカルなニュースを報道する集団であるPeople's News Serviceに所属している一人であった。そして、私は故Chris Harrisonが以前にIMG¹⁰⁾のメンバーであった、とも考えた。しかし我々には概して、従来の左翼的な政治経験がほとんどなかったのである。誰も「The Next Step」の冊子を販売しているLNのミーティングには来なかった。私がインタビューしたLNメンバーの最も一般的な政治的経験は、女性運動へのかかわり合いであった。また、他の人はスクワット運動squatting movement¹¹⁾にかかわり合いを持っていた。多くのメンバーは、RCの階層構造と非常に異なった方法を使用しながら組織化されていた。私たちは、UPIASより政治的に洗練されていなかったのである。私はそれが、LNにとって実際に悪いことであるとは確信してはいない。

UPIASは自身を非常に明確に定義しており、組織の外部や運動過程においても、多くの人々を定義付けていった。例えば、UPIASの方針要綱Policy Statement¹²⁾は、「我々の立場は多くの人の立場と類似している。例えば、中年や初老、神経衰弱break-downs、あるいは精神的にハンディキャップを持っている人々」と述べている。また、連帯感を表現する際には、その区分すらも除かれるのだ。対して、LNは、よりあいまいな区分であるという強味を持っていた。それは、LNが必要な人間であれば誰でもアクセス可能な状態としておくというものである。実際にはその主張は、結局、学習障害やメンタル・ヘルスのサバイバーらには届かなかつたと見なされてしまうのであるが。経験の共有は、いつもLNの活動の重要な部分であった。ミーティングは非常に感情的であっただろうと言える。私は、それがLNの外部の人々によって嘲りの対象と見なされているのを知っている。以下のあるコメントが私をそう考えさせたのだ。「UPIASは人々に考えさせ、

LNは人々を泣き叫ばせていたcry」。

私は、お互いの詳細な個人的な経験を聞くことが、どのように政治化されているのかを強調したい。あなたが視覚にインペアメントがあったと仮定して、人々があなたを避けるために道路を渡っているのを見ることをどのように感じているのか、ということがそうである。または、発作から意識を回復するということをどのように感じているのか、といったような、ろう問題、あるいは障害の政治上の議論へのアクセス困難が障害者にはあるという現状を知っているためである。

我々はグループとして、自身らの個人的な事情への苦しみから、集団として障害者のために怒りを感じるといった方向性へ移行していった。我々は、かなり強力な連帯感を持っていた。そして、LNメンバーは、より広域的に障害者運動へその連帯感をもたらしていった。私がこのペーパーのために、元LNメンバーにインタビューしたとき、メンバーの多くが、LNの活動に対して友情を見出したことに関して語ったのである。それらの友情の多くが、LN自体よりも長い間継続しているのである。2、3人のインタビューは、LNの活動が楽しかったことを話していた。その語りにおいて、私がLNにおいてかつて聞いたような言葉は、UPIASへ当てはまるようなものではなかった。LNの活動はFestival Hallで、1981年のHuman Values Conference¹³⁾などのデモ行進への参加に関わっていた。それは、フィリップ王子によって開かれた障害者の国際年の重要なイベントではあるが、実際には障害者を包括していなかったのである¹⁴⁾。

我々はUPIASと時々共同的に活動を行っていた。例えば、南アフリカのチームが配置された抗議における国際ストークマンデビル競技会Stoke Mandeville Games¹⁵⁾への参加などがそうである。しかし、最も重要かつ具体的な形で現れた業績は、「In From

The Cold」という雑誌の生産であった。我々は、自身らでその資金を調達していった。そして、我々は2号を生産する余裕がないままに、創刊号を売らなければならなかった。それぞれの号は千部印刷された。Michelineは、この雑誌に向けて送られてきた手紙から判断するに、各コピーが約6人によって読まれたと推測している。こうした事実が示すように、LNのアイデアはフォーマルなメンバー資格を遥かに超えて届いていたのである。私がインタビューをした誰もが、LNがどのように終わったのかについて、確信的な物言いをしているようには全く見えなかった。つまり、LNは明らかに巨大な恨みが蓄積していったような解散ではなかったと言えるのである。

LNがどうRCと関連した役目を果たしていたのか、という疑問や組織としての無構造化という2つの問題は、組織内に緊張を引き起こしたことは明確である。RCの主義主張について、それが問題であると最も考えそうな人々が最も政治的な経験を持つ人々だったのであった。彼らは、組織が通常の民主的な行き方で運営されていくことを当然のことと思っていた。こうしたことは、組織内の緊張を緩和するための助けとはならなかった。LNの最も多くの活動的なメンバーは、そういった理由からLNから疎遠になっていったのである。そうしたメンバーこそ、既存の障害者運動でカバーされていなかったような、残余的な部分にもより大きくかかわり合いを持つことを、まさにLNにもたらしえていきそうなメンバーではあった。

LNは組織ではなかった、という何人かの重要な人物の主張から提起された問題も見られた。かつて、LNがイギリス障害者協議会BCODP (British Council of Disabled People)へ参加を行うべきではない、という決定が行われたことがあった。なぜなら、LNは組織ではなく解放のためのネットワーク

liberation networkだからであるという理由によってであった。これは、LNのミーティングにおいて最も愚かな着地点となった。この話のインプリケーションは、BCODPへLNは参加すべきであったという意味に思えるかもしれない。しかし、もしLNが他の障害者やその組織と共に活動しないのであれば、それはLNが副業sidelineとして行われてしまっていると自身らを非難していただろう。LNは、障害のラディカルズムへの本当に重要かつ影響力のあるエントリー・ポイントであったのだ。それは、当時の障害者らはUPIASが接触し難いように見えたためであり、対して、LNはUPIASより近付きやすかったためである。抑圧や隔離をされた人々は多くの苦悩を持ち得るが、LNはそれへの対処方法を彼らに与えていった、ということは認められているrecognise。結果的には、LNはお互いの状況に関して学んだ障害者らを包括する大きな枠組みとして開かれていたのである。

LNの遺産はそのメンバーである。障害者運動は障害者の連帯感の強さにより、エンパワメントされた人々全てから多くのものを獲得してきた。そして、我々障害者に対して全ての権利を得ようと取り組んでいかなければならないというアイデアを吹き込んできたimbued。なぜなら、LNメンバーらは障害者の若年層であったため（それはLNの政治的な洗練さ不足の1つの理由でもあった）、彼らの多くはまだ活動的であるからである。LNメンバーは障害平等研修disability equality training¹⁶⁾の開発において影響力を持っていた。彼らは、多くの障害者組織の重要な部分を形成した。LNメンバーはAlternative Talking Newspapers Collectiveの重要な部分を担った。彼らの仕事としては、2つの出版物「Left Out」と「Women's Tape-over」は、ラディカルな道具を視覚にインペアメントを持つ人々へ利用可能にしたのである。それは、

王立盲人擁護協会RNIB (Royal National Institute of the Blind) が決して行わなかったことである。また、彼らは1984年に設立された、アートにおける障害者のキャンペーンであるFair Playにおいて、大きな役割を果たした。Kirsten Hearnは、障害者の輸送へのアクセス向上のキャンペーンにおいてLNのアプローチ方法の影響力を指摘している。それは、アクセスしやすいバスの不足を理由として、セントラルロンドンCentral Londonの交通を、抗議によって定期的に止めてしまうという方法である。それが効果的であった理由は、彼女が述べるように、「我々は互いに支え合っていた。それは、我々メンバーは怖じ気づかないで、行動を成し遂げると確信していた」からである。

私が考えるには、LNの終焉によって、障害の個人的な政治が我々の運動の発展後においては、過小評価されていったのであるunder-valued。我々の運動は、そうした評価のために、より不毛となっていると考えられる。興味深いことに、2つのアプローチの間にある種の統合が起こった領域が、ディスアビリティ・アートについての領域であったのだ。ディスアビリティ・アートのスタンダードな定義は、それが障害の個人的な経験により伝えられるアートだということである。その声明statementにおいては、障害disabilityは社会モデルにおけるような意味で使用されている。しかし、障害者らの生きられた経験の強調は紛れもなくLNの態度なのである。

Vic FinkelsteinやSian VaseyなどといったUPIASの元メンバーは、ディスアビリティ・アート運動の組織構造を創造することにおいて、かなり影響力を持っていた。しかし、ディスアビリティ・アートの内容は、LNによって大いに影響を与えられていたのである。個人的な政治へ重なるような、あるいは、ディスアビリティ・アートの多くがアートの実践領域と重なると言えるような、

数多くの領域が存在している。そのため、そういった多様な領域とディスアビリティ・アートはリンクされるべきであるというのは避けられないだろう。しかし、多くのLNメンバーが、障害者運動に従事している活動的なworkingアーティストであったという事実によっても、ディスアビリティ・アートは形成されている。それは、Sue Napolitano、Nancy Willis、Keith Armstrong、そしてMary Duffyといった人々を含んでいる。LNの非障害者メンバーはGraeae Theatreの共同設立者であるRichard Tomlinson、そして組織形成の創設者Gina Leveteを含んでいる。組織形成のための最初の障害者のディレクターは、Chris DaviesというLNのメンバーだった。彼はMaggie Woolleyによって連れて来られた、まさに最初の週末の会のメンバーの一人である。Ruth Bailey、私のインタビュイーの一人は障害者運動を記録するジャーナルである、ロンドンのディスアビリティ・アートの元編集者である。

ディスアビリティ・アートは、障害者の政治からいくらか非難されるgets some stickことがある。それは乱雑かつ不統一で、いつも専門用語としてディスアビリティ・アートを定義するというわけではないからである。ディスアビリティアートは、どのアプローチが主流のものであるのかについて、決定を行うことなしに異なったアプローチを供給しているような、異なった人々や集団で一杯なのである。ディスアビリティ・アートは、我々の運動に参加している多くの肛門期anal-retentive¹⁷⁾のメンバーへ忌み嫌われる方法で継続されている。しかし、ディスアビリティ・アートが繁栄していくその時には、どのように民主的に動いていくのだろうかという問題がある。私はそういった意見の相違を嬉しく思う。なぜなら、それは我々が議論を行うことができるということの意味しているからである。私は、ディスアビリティ・アートをど

のような人間であったとしても決して完全には定義しないことを嬉しく思っている。なぜなら、ドアを開けそこを通過して入ってくるだろう新しい障害者の集団のために、LNのドアは今でも開いたままとされているからである。そして、彼らはこれまでに、我々の運動が行っているある分野の活動よりも、ディスアビリティ・アートという分野においてより大きな成功をしているのだ。

学習障害や精神障害のサバイバー、そして、神経学的な障害を持つ人々は、各々自身の活動を成功させており、我々とともに運動に参加することになっていったのだ。つまり、我々障害者は誰なのだろうか、という考えを広げていくことによって、参加をするようになっていくのである。我々がいまだに考えも付かないようなある集団が、我々の運動に共に参加していくという状況を形成していくために、我々は集まり、manifestoを作成し、ガーディアン紙に手紙を書くようになるのかもしれない。もし、そういった集団が活動しているのであれば、我々はその集団へ注意を払っていくというようなことではないのだ。そうしたことはただ単に起こりえるのだ。なぜなら、幾人かの個人的なアーティストが我々と心を通わせているためである。私たちは彼らの歌を聞き、ダンスを見て、詩を読む。そして、それらは我々に届く。あなたがたは以下の瞬間を得るための膨大な知的訓練を必ずしも必要とはしていない。それは、自身ではない他者である人々もまた抑圧を分け合うことをあなたに知らせるような、彼らの経験のアイデンティティ確立の瞬間のことである。なぜなら、現実的に言えば、運動には冷静さheadはもちろんのこと愛heartも必要としているからである。LNにおけるそうした鼓動heart beatは、ディスアビリティアートにおける今日のうねりbeatsなのである。

この資料は、個人的な回想とKeith Armstrong、

Ruth Bailey, Kirsten Hearn, Micheline Mason, Edwina McCarthy, Anne Rae, そしてNancy Willisへのインタビューが元となっている。

原注

- (1) Jo Freeman: The Tyranny of Structurelessness. Berkeley Journal of Sociology, Vol. 17, 1972_73, Ms. Magazine, July 1973.
- (2) Liberation Network of People with Disabilities. List of members-January, 1983.
- (3) Barnes 2006: Understanding the Social Model of Disability: Background notes to a verbal presentation at the'Reasonable Access to the Built Environment for Persons with Disabilities'Research Seminar, Weetwood Hall Hotel, Leeds.

訳注

- 1) 一般的に、ガーディアン紙はイギリスの中道左派・リベラル寄りの傾向があり、高級紙quality paperに位置付けられ上流および中流、そして知的階級を中心に読まれている権威のある新聞である（世界大百科事典第2版、デジタル大辞泉）。なお、この情報は論文の翻訳として特に必要ではないように見えるかもしれないが、ガーディアン紙にPaul Huntが手紙を送った理由を知るためにはこうした文化的な背景についての理解が重要であると考えたため、注として記しておく。
- 2) CCおよびRCとは、Harvey Jackinsの著作を理論的基礎としているカウンセリング方法の1つである。ここでは、現在Micheline Masonが従事している障害者へのカウンセリングの方法の総称として取り上げられている。なお、日本においては障害者へのピアカウンセリングの方法と関連して紹介がなされている。例えば、立岩（1992a, c）の「ピア・カウンセリング関連文献」において、Harvey Jackinsの"The Human Side of Human Beings: The Theory of Re-Evaluation Counseling"が挙げられている。なお、訳者の知識不足により、RCなどについてはこれ以上詳細には説明はできないため、Mason（2013a, b）やThe Re-evaluation Counseling Communities（2013）

を参照していただきたい。そして、ピアカウンセリングについては、立岩（2003）を参照していただきたい。

- 3) サイエントロジーとは、L.Ron Hubbardによりアメリカで開始され、現在は世界規模で広がっている巨大な新興宗教である。なお、CCやRCとサイエントロジーとの関連については、本論と特に関係がないことからこれ以上ここでは言及しないこととする。
- 4) Lower Shaw Farmは、現在、ヨガ、マッサージ、ピラティス、工芸など多くの活動やワークショップを行う場所である（その活動の詳細は、Lower Shaw Farm (2013)などを参照）。また、Swindonはロンドンから西へ1時間ほど行った場所にある人口15万程度のイギリスの都市である。
- 5) Peace Newsというのは、Humphrey Mooreにより1936年に創刊された平和主義者の雑誌である（Peace News2012）。
- 6) CCには、個人の人生の課題などに応じて色々なトレーニングコースcourseやクラスclassがあるということである。ccについてのより詳細な知識は、注9と同様に、Mason (2013a, b) やThe Re-evaluation Counseling Communities (2013)などを参照していただきたい。
- 7) LNの最初の雑誌であり、その内容として「障害者の解放運動における方針」（Liberation Network of People with Disabilities1981）などが掲載されている。その内容としては、5つの具体的な行動綱領から成るものである。以下では、最初の3つの綱領の内容を引用し訳出することで、本論におけるLNの思想理解の資料の1つとする。

1. 全ての人間は以下のための平等な権利を持っている。それは、生きること、十分に食べること、住むこと、綺麗な水へアクセスすること、健康や衛生について一般水準を満たすこと、教育を受けること、仕事を行うこと、結婚すること（あるいは、しないこと）、子供を持つこと（あるいは、持たないこと）、自身らのセクシャリティを決定すること、意見を述べること、自身らの生活に影響を与える決定へ参加すること、自身のコミュニティでの社会生活において十分に分配を受けること、自身の能力をできる限り使用して、他者のウェルビーイングに貢献すること、である。

2. 現在、世界の人口における特権化されているわずかの部分の人間が、全ての権利をエンジョイしている。大部分の人々はおおむね経済的問題を抱えている集団に分割される。その分割の基準は経済的なものである。それらの集団の多くは、以下のよう

にさらに分割されている。例えば、黒人の中の女性、有色人種（ブラウン）、白人（ホワイト）、アジア人（イエロー）、若者、年寄り、結婚している人、シングルの人、ユダヤ人（ジューイッシュ）、ゲイ、ワーキングクラス、である。それは、無力なマイノリティとしての自身らをそれぞれが経験するほどに分割されていく。

3. 分割の基準は経済的なものである。そのため、その状況を継続するための権力は、主として、心理的な自然さpsychological natureからのものである。そのための情報は以下のようなステレオタイプな方法により与えられる。それは、間違っている、あるいはバイアスのかかった歴史、マイノリティ集団に対する暴力の示威（例えば、ホロコースト）、そして、社会において自身らの立場を占めている、特権的である人々と経済的に困窮する人それぞれ両方の多数を納得させるような、その他数え切れない方法において行われていく。それぞれの人間や集団を認めるという考えにおいて、個人的信念は自身らの状況を受け入れることである、となっていく（以下、綱領5まで続いていく）。（Liberation Network of People with Disabilities1981）

また、同時代に出された障害者インターナショナルDPIの行動綱領はDriedger (1988)にその全訳があるため、本論で出てきたような（あるいはその他の）団体の綱領との比較検討などが必要であれば適時参照していただきたい。さらに必要であれば、現在の「DPI世界規約」（DPI日本会議2013）やその原文であるConstitution of Disabled People's International (Disabled People's International2013)は、それぞれDPIのホームページで確認が可能である。以下では、本論の理解を促進していくため、当該DPI行動綱領の「基本的な価値観と基礎的権利Fundamental values and basic rights.」の「基

本的な価値観」の部分翻訳したものを掲載しておくので、その他の団体のものと比較して参照していただきたい。

基本的な価値観

我々は全ての人間が平等に価値を持っているということを主張する。この信念は、障害者が社会の全ての領域に参加する権利を持っているということを暗示している。利用可能な全ての技術的、実践的手段は、サービスの多様な形式と我々の社会における社会的活動において、障害者の参加を促進するために使用されるべきである。

平等の価値を持つというこの原理は、それぞれ、そして全ての個人のニーズが平等に重要性を持つということを暗示している。それらニーズは我々の社会における計画のための基礎となるように形成されなければならない。全ての利用可能なリソースはそれぞれ、そして、全て個人のための平等な参加を保障するための方法として用いられる。したがって、障害者の方針はしばしば社会における資源の分配と関係があり、大抵は政治的イシューとなる。

この哲学の結果として、全ての発達体系scheme、あるいは政綱programmeは障害者の参加へ至る基準を含んでいなければならない。サービスや他の活動が商業的な基準により利用可能となるフィールドにおいて、障害者のための基準を考慮しながら、社会はサービスや活動から締め出されないことを保障するために、障害者の利益を守らなければならない。

特定領域の活動に責任のある人間もまた、特定の活動を行うための主要な応答責任や障害者へアクセスを可能にする責任がある。社会においては、最高の政策決定機関決定が障害者の立場のための究極の責任を負っている。

障害者は自身らの自然な環境において成長するための権利を持つ。したがって、我々は全ての隔離の形式を拒絶する。そして、我々は特別な施設における人生の孤立を受け入れることを拒否する。(DPI1981)

- 8) ロンドン周辺の州the Home Countiesとは、Essex, Kent, Surrey の3州のことであるが、その他East Sussex, West Sussex, Hertfordshireをも含める (Weblio英和辞書)。

9) Eireとは、the Republic of Ireland、つまりアイルランドのアイルランド語名、また旧正式名である (Weblio英和辞書)。

10) People's News Serviceについては、それについての資料が見つけれなかったためこれ以上の説明は行うことができない。また、IMGとは、一般的には総合的なメディア事業を行っているアメリカ企業のインターナショナル・マネジメント・グループ:International Management Groupについての略称であるが、当該部分がそれを示しているのかは不明である。

11) 丸山 (2009) によれば、スクウォットsquatとは、使われていない土地や建物を法的権利のないまま無断で占拠するということである。また、スクワッターは法的に占有できる住処を持たないという意味ではホームレスの一形態とも言える、としている。

12) これは、Union of the Physically Impaired Against Segregation (1974) Union of the Physically Impaired Against Segregation: Policy Statementのことである。その内容は、団体の目的と27項目の方針要綱Policy Statementから構成されているものである (一方で、LNには訳注7においてすでに説明を行っているようにLiberation Network of People with Disabilities (1981) という障害者の解放運動における方針が存在している)。ここでは、その目的と方針要綱の一部を以下において引用しながら訳出することで、具体的にUPIASという組織がどのようなものであったのかについて、我々が理解をしていくために示していくことにする。

目的

このUPIASは、社会における十全な参加への準備への代替として、身体障害者のために全ての隔離施設があるという主張を行うことを目的としている。そうした準備は以下の必要なものを含んでいなければならない。それは、日常生活の活動においてできる限り最大限の自立の獲得を我々に可能とさせるために国家から必要とされる、必要な財政的、医療的、教育的、そして、その他の援助である。それは、移動性を獲得するため、生産的な仕事を請け負うため、そして、我々が選択する自身らの生活全ての十全なコントロールを望む場所や方法に

よって生活していくために、である。

方針要綱

1. 障害と隔離

今日のイギリスは、社会へ十分に貢献することを我々に可能にさせる必要な知識が、そして、身体障害者を人生のメインストリームに連れてくる進歩した科学技術がある。しかし、我々のような基本的な人間の問題に国家資源を集中させる代わりに、実際には、彼らはしばしば以下のような浪費をしている。例えば、破壊のための洗練された武器を作ること、そして、コンコルド（超音速旅客機）やCentre Point（大型ビル）のような計画、などを行っている。だから、そういった今日の巨大な生産性の産物があるにもかかわらず、国家は障害に打ち勝つための援助を行うことができるのである。その誤った方向性を持っている生産性は、多くの身体障害者が、いまだ社会において不必要に十全な参加を閉ざされているということを意味している。我々は、段差、不十分である公共および個人的な移送、不適切な住居、工場やオフィスでの厳格な仕事のルーチン、最新の援助や設備の欠如などにより、自身らが孤立させられ、締め出されていることを理解している。

2. 正しい方法で行う十分な資源の使用によって、そうした多くのバリアに打ち勝つことが可能となっている重度な障害者の個別の事例はごく僅かではあるが存在している。そうした事実は、（障害者と健常者の：訳者挿入）統合（インテグレーション）が可能であるということを理解させる。

しかし、集団としての我々は、いまだしばしば隔離され劣等的な施設で我慢させられている。我々は特別学校 special schools、専門学校 college、あるいは訓練所 training centres に送られる。我々は規則正しく隔離された工場 factories、センター centres、収容所 Homes、寄宿寮 hostels、そして、クラブ clubs に流されている。もし、我々が上手く動き回っているように見えるのなら、それはしばしば古くさい三輪車や特別にラベルされた輸送を使用しているためである。そうした全ての隔離された援助形態は、過去の時代から見た場合においてある一定の進歩を示していると言える。しかし、統合

（インテグレーション）は、可能であると明示された現在では疑いなく存在しているという意味において、隔離された施設での我々の制限は、ますます抑圧的で非人間主義的なものとなっていると言える。

3. 最近の進歩

障害者や彼らの親類、そして友人らの闘いは、科学技術とメディカルサイエンスにおける前進と共にある。近年、一般的な社会において、より十全に参加をしている障害者の数は大幅に増加しているという事実がある。我々を隔離するいくつかのバリアは、部分的には打ち破られ、取り除かれている。だから例えば、麻痺のある人間、あるいは視覚障害者の多くが働くことや、比較的活動的な生活を営むことが可能となるという事実は、50年前には想像できなかったことである。そうした発展は健常者の態度へポジティブな変化が見られることを意味する。それは、健常者が自身らの間にいる障害者の存在へ呼応していくような変化のことである。

4. そうした進歩は、一般の態度がより良い方向へ変化しているということも示している。そうした進歩はさらなる変化を獲得していくための主要な意味としてだけではなく、社会における我々の参加の増加をも示している。しかし、その進歩は集団としての障害者の立場を基本的な現実のまま取り残されていることから我々の目をふさぐことは出来ない。この社会は生活費を稼ぐために、労働市場における競争を行う必要性を基礎としている。労働者を雇用する側には、身体障害者は障害のない人間より一般的に良い買い物ではないとされている。我々はしたがって、抑圧された集団としてこの社会の底辺やその近辺に位置付けられることになる。

5. 低い交渉力 LOW BARGAINING-POWER

我々が雇用され継続されていくということは、障害者の比較的低い生産性が以下のことを意味するようになる、ということである。つまり、障害者への適切な治療や施設を交渉する場合において、その交渉力自体が低い low bargaining-power ということが、低い生産性をカバーできない力として明らかになるのである。我々の立場は多

くの人の立場と類似している。例えば、中年や初老、神経衰弱 break-downs、あるいは精神的にハンディキャップを持っている人々、黒人、元囚人、スキルのない労働者などである。我々は大抵仕事を失う最初の人間（最初に首にさがちであるということ:訳者挿入）である。そして、ゴミ捨て場に投げられる。それは経済的なニーズに適していないためである。もし、我々がラッキーであるなら、我々は再度労働市場へ引っ張られていくだろう。それは、ビジネスがもう一度景気よくなり始める時に、より劣悪な賃金労働を行う場所へ引っ張られていくということである。もし、我々がアンラッキーなら、我々はその時にミーンズテストによる貧困線より低下させられている人生の局面に直面してしまうかもしれない。もし我々がかなりアンラッキーであれば、我々は魂が破壊される施設へ引き渡されるかも知れない。

6. 施設—究極の人間のゴミ捨て場

UPIASは抑圧された集団としての我々の立場の現実が、この社会の究極の人間ゴミ捨て場である隔離された入所施設において、かなり明かだということを理解できると信じる。数千人の人間、障害者である彼らの罪は身体障害であるということだけである。彼らは人生の監獄行きという判決を下されたのだ。今日ではそれは長期的なものとなっている。膨大なマジョリティーのために、いまだ代替的ではなく、魅力的ではなく、良い振る舞いを行っても刑期の短縮もなく、死ぬことを例外として逃れられない場所である。

7. 孤立や隔離を極度に行う入所施設において、そこで彼らされる残酷さ、かなりの恥辱、身体的・精神的な剥奪は、身体障害者のメンバーで構成された社会での、本質的に抑圧的な関係性を露わにしていく。特別学校のような多くの同様の場所には、入所者への援助のためベストを尽くしているスタッフやボランティアがいる。しかし、彼らの努力は隔離施設の基本的な機能により、組織的に圧倒されることになるのだ。その機能は障害者の一団を世話することである。その過程において、彼らは、障害者が現実的に社会に十全な参加を行うことを期待できないこと、また、良い生活を送る

ことも期待できないことを納得していくのである。

その施設機能は一般的に見れば適切なのである。しかし、それはこの特別な入所施設が最初にできた時点においてはそうである、ということである。というのは、（現代社会における:訳者挿入）競争的な状況において、多くの身体障害者は彼ら職員の援助なしに生存することすらできないからである。しかし、現在はそうした生存可能性は増加してきている。また、重度な身体障害者が生存していくだけではなく、十全に統合（インテグレート）されるようになり労働を行っていくことも増加してきているのである。隔離施設のニーズはもはや隔離を行うためには存在していない。そうした現実、今日の英国の変化し続ける社会的、そして技術的な状況とは全く調和していないのである。

8. 入所者の闘いのための支援

UPIASは、この無視されている施設問題が、障害のフィールドにおいて決定的な重要性を持つものと見なしている。我々はしたがって、より良い状況のため、現存している入所施設において入所者の闘いを支援することをより強調している。それは、個人的な出来事への十全なコントロールのため、そして、自身らの施設、センター、ユニットのマネジメントにおける民主的議論のため、である。UPIASは以下のような全てのもくろみを阻止する。それは、見舞いの制限を強いること、起床や就寝の時間を固定すること、入所者が望む外出や帰宅への自由を制限すること、医療的な、あるいは看護的な意見を強制されること、また入居者自身らの意志に反して他の施設へ移送すること、といった権威からのもくろみのことである。

9. UPIASは、個人的なニーズのために他者へ依存する人がいる場合での、しばしば否定されてしまう基本的権利に焦点を当てている。その特権のニーズをUPIASは理解している。施設における障害者の生活には（我々からの:訳者挿入）援助を提供されるだろう。もし、彼ら障害者が自身らの権利の保持についてローカルな組織化を行っていききたいのなら、である。それに対してUPIASは助言を行っていく。それは交

渉の援助のための相互的な援助サービス、入所者の委員会などの構成、などといった助言である。また、求められれば、我々はある特定の闘いに必要となる国家的な原則 national basis の宣伝 publicity や支援を行うための準備や召集に動くだろう。

10. 代替のニーズ

UPIASは、ボランティアな組織、あるいは国家などによる、どんな隔離施設の建築にも反対する。我々は、自身らの住居において行われる障害者への適切なサービス（自宅でのサービス、今で言う居宅サービスのこと:訳者挿入）を供給することは、資源のより良い使用法であるということを感じている。我々はまた、自宅の代替ではない、つまり入所ではない住居の供給を急遽必要としている。例えば、スウェーデンのFOKUSスキーム（スウェーデンのThe Fokus Societyにおけるケアのこと、障害者自立生活センターのような優れた理念を基礎とした実践を行っている:訳者挿入）の流れに沿っているような、安全で、統合的な（インテグレート）、そして、広範に個人的な援助を必要とする障害者の活動的な生活に対して本当に優れている実践を行っていくサービスのことである。UPIASは施設への入所や退去をしようとしている人間であれば、誰でも支援していくだろう。しかし、我々は現在の時点においては、施設生活を（障害者の生活のための場として:訳者挿入）ベストな解決方法であると見なしている人々の個人的な感情を十分に尊重していく。我々は、施設収容自体を隔離と見なすような（我々の）見解について、いくらかの障害者らには同意されないだろうということも理解している。そして我々は、彼ら（いくらかの障害者ら）がそういった（施設収容イコール隔離という）議論を前面に押し出していくために組織化されることを望んでいるのである（以下、方針要綱27項目までであるが、ここでは紙幅の都合上省略する）。（Union of the Physically Impaired Against Segregation1974）

- 13) Festival HallとはロンドンのSouthbank Centreに位置している1951年に建てられたRoyal Festival Hallのことである。また、1981年のHuman Values Conferenceについては、その資料などについて発見できなかったため、これ以上言及しない。

たため、これ以上言及しない。

- 14) フィリップ王子とは、現在のエディンバラ公爵フィリップ王配（Prince Philip, Duke of Edinburghであり、イギリス女王エリザベス2世の夫のことである（the official web site of the British Monarchy2013）と考えられる。さらに、この部分の「実際には障害者を包括していなかった」とは、Human Values Conferenceにおける理念ではインクルーシブなものであったが、「実際には」健常者主導で行われたConferenceであったということを示しているのだと考えられる。
- 15) 国際ストークマンデビル競技会とは、脊椎損傷者だけによるスポーツ競技会であり、後にパラリンピックともなった。また、現在はIWAS世界競技大会IWAS World Games、(IWAS:International Wheelchair & Amputee Sports Federation) の名称となり継続されている。
- 16) 障害平等研修とは障害者平等トレーニング disability equality training:DETと翻訳することも可能であるが、三島（2013）など先例に倣いそのように訳出した。なお、障害平等研修の詳細については三島（2009a, b;2012, 2013）や久野（2003;2005）、そして Gillespie-Sells et al. (=2005)などを参照していただきたい。
- 17) Freud, S.が“Charakter und Analerotik (= (1908)『性格と肛門愛』)”などで述べたような口唇期の次にある成長ステージのことであり、2歳から4歳までの時期を指示している。自身の外部環境にある両親や文化などと自身の情動や欲望との差異を認識し始め、葛藤や反抗を伴うことにより、性格形成へ大きな影響を与える時期であるとされているが、ここでは比喩的に障害者運動やディスアビリティ・アートの抵抗という特徴や価値を強調するために使用されていると考えられる。

訳者解説および訳注参考文献

- Barnes, C.・Marsler, G.・Shakespeare, T. (1999) Exploring Disability:A Sociological Introduction, Polity Press. (=2004, 杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳『ディスアビリティ・スタディーズーイギリス障害者概論』明石書店).
- BBC (2013)「BBC-About the BBC」(<http://>

- 2013/11/10).
- 三島亜紀子 (2013) 「DET、当事者による障害平等研修」 (<https://sites.google.com/site/detsyougai/home>, 2013/11/10).
- Oliver, M. (1990) *The Politics of Disablement*, Macmillan Publishers (=2006、三島亜紀子、山岸倫子、山森亮、横須賀俊司訳『障害の政治 イギリス障害学の原点』明石書店)。
- Peace News (2012) 「About Peace News」 (<http://peacenews.info/about-peace-news>, 2013/11/10).
- Royal College of Physicians (2013) 「Re-framing disability: portraits from the Royal College of Physicians | Royal College of Physicians」 (<http://www.rcplondon.ac.uk/museum-and-garden/whats/re-framing-disability-portraits-royal-college-physicians/allan-sutherland-fo>, 2013/11/10).
- 島先京一 (2010) 「アール・ブリュットの魅力と意義、そして課題」(障害学会第7回大会一般研究報告(2010年度:東京大学駒場「I」キャンパス)) (http://www.jsds.org/jsds2010/Presentation/6_2_Shimasaki.doc, 2013/11/10).
- 島先京一 (2011) 「アール・ブリュット論に向けて: 今、語り得ること」『成安造形大学紀要』(2)、203-18.
- 杉野昭博 (2007) 『障害学—理論形成と射程』東京大学出版会.
- Sutherland, A.T. (1981) *Disabled We Stand*, Indiana Univ Pr.
- Sutherland, A.T. (2006a) 「Sutherland – Presenters & abstracts – 2006 Disability Studies Conference Archive, Lancaster University」 (http://www.lancs.ac.uk/fass/events/disabilityconference_archive/2006/abstracts/sutherland.htm, 2013/11/10).
- Sutherland, A.T. (2006b) 「The Other Tradition: from personal politics to disability arts」 (http://www.lancs.ac.uk/fass/events/disabilityconference_archive/2006/papers/sutherland2006.pdf, 2013/11/10).
- Sutherland, A.T. (2013) 「Allan Sutherland (Profile for Horiuchi) .doc」 unpublished manuscript.
- 田中みわ子 (2009a) 「障害とパフォーマンスの身体—イギリスにおけるディスアビリティ・アートの実践と障害文化の政治的共同性」『文化交流研究』(筑波大学文化交流研究会) (4)、27-48.
- 田中みわ子 (2009b) 「イギリスにおけるディスアビリティ・アートと障害文化の政治的共同性—パフォーマンスの身体に着目して」(障害学会第6回大会(於:立命館大学)報告要旨) (<http://www.arsvi.com/2000/0909tm.htm>, 2013/11/10).
- 田中みわ子 (2012a) 「障害のある身体と眼差し: メアリー・ダフィーのパフォーマンスを事例として」『文化交流研究』(筑波大学文化交流研究会) (7)、1-20.
- 田中みわ子 (2012b) 「身体のパフォーマンスと意味空間」(障害学会第9回大会(於神戸大学)ポスター詳細報告原稿) (<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/jsds/details/tanaka-detail.doc>, 2013/11/10).
- 田中耕一郎 (2005) 『障害者運動と価値形成—日英の比較から』現代書館.
- 立岩真也 (1992a) 「10ピア・カウンセリング関連文献の紹介1・<米国>」ヒューマンケア協会編(立岩真也編集)『自立生活への鍵:ピア・カウンセリングの研究』ヒューマンケア協会.
- 立岩真也 (1992b) 「11ピア・カウンセリング関連文献の紹介2・<日本>」ヒューマンケア協会編(立岩真也編集)『自立生活への鍵:ピア・カウンセリングの研究』ヒューマンケア協会.
- 立岩真也 (1992c) 「ピア・カウンセリング関連文献の紹介・I <米国>」 (<http://www.arsvi.com/ts/1992a08.htm>, 2013.08.19).
- 立岩真也 (1992d) 「ピア・カウンセリング関連文献の紹介・II <日本>」 (<http://www.arsvi.com/ts/1992a09.htm>, 2013/11/10).
- 立岩真也 (2003) 「ピア・カウンセリング peer counseling」 (<http://www.arsvi.com/d/pc.htm>, 2013/11/10).
- 立岩真也 (2012) 「社会モデル (social model)」 (<http://www.arsvi.com/ds/smd.htm>, 2013/11/10).
- The official web site of the British Monarchy (2013) 「The current Royal Family>The Duke of Edinburgh>Background」 (<http://www.royal.gov.uk/ThecurrentRoyalFamily/TheDukeofEdinburgh/TheDukeofEdinburgh.aspx>, 2013/11/10).
- The Re-evaluation Counseling Communities (2013) 「About Re-evaluation Counseling」 (<http://rc.org/>, 2013/11/10).

The World Institute on Disability (2004)

「Disability World:A bimonthly web-zine of international disability news and views·Issue no.23 April-May 2004」(http://www.disabilityworld.org/04-05_04/arts/briefly.shtml, 2013/11/10).

Union of the Physically Impaired Against

Segregation (1974) 「Union of the Physically Impaired Against Segregation: Policy Statement」(<http://disability-studies.leeds.ac.uk/files/library/UPIAS-UPIAS.pdf>, 2013/11/10).

